

# 地球市民学

## 共生と平和の科学

### 第2節 地球市民学 後期

原 順 子・三小田 博 昭  
中 村 明 彦・佐 藤 良 子

**【抄録】** 後期の地球市民学は『共生と平和の科学』という講座名で授業実践をしている。現在起こっている地球上の諸問題を「子どもの人権」「ジェンダー」「貧困と国際協力」という具体的・多元的な視点から探究し、地球市民として解決に向けて自分たちに何ができるかを科学的に学ぶ講座である。今年度はプレとポストに行っているアンケートを分析し、授業内容や授業方法を考察する。

**【キーワード】** 共生 平和 子どもの人権 ジェンダー 貧困 国際協力 アンケート

#### 1 はじめに

##### (1)目標

- 1) 地球上の様々な集団が互いに認め合い、平和に共生共存できる可能性を探ることができる。  
(認知的目標 本校SSHの目標ではB・C)
- 2) 同じ時代を生きる身近な人々や地球上の遠く離れた人々の生活に関心を持つことができる。  
(情意的目標 本校SSHの目標ではA・D)
- 3) 持続可能な共生社会の実現のために自分たちに何ができるかを考えて行動することができる。  
(態度的目標 本校SSHの目標ではB・C・E)

##### (2)学習方法—S L P IIの独自性

研究開発実施5年目の本年度は「子どもの人権」「ジェンダー」「貧困と国際協力」の3つをテーマに目標達成を目指す。学習方法は研究開発実施から一貫している。それは、1) 複数の教員(1クラスに3人)、2) 学外講師の授業、3) 題材は教師が選ぶ、4) 答えのない問題に取り組む、の4つを講座の独自性として掲げていることである。具体的な方法は以下の通りである。

###### 1) 複数の教員(1クラスに3人)

1クラス40人の生徒が3つのテーマから1つを選び、教員3人で同時展開していく。1グループのみで行う授業の他に、2グループ合同授業を一回ずつ(1グループでみると二回)、3グループ合同の授業を導入とまとめの段階で行い、リンクしながら学び合っていく。

###### 2) 学外講師の授業

今年度の学外講師は、共同授業者として愛知淑徳大学異文化コミュニケーション専攻の佐藤良子先生に来ていただいた。オリエンテーションから全授業に参加していただき、時には授業者として、時にはコメンテーターとして、講座全体のコーディネーターとして参画

していただいた。さらに授業目的に応じて、南山大学 青木清先生(法学部)、名古屋大学高井次郎先生(教育学研究科)、青年海外協力隊OB(石川智也さん・奥平真巳さん・水谷寛子さん)を招いて授業を行った。

###### 3) 題材は教師が選ぶ

教科書がないことを利点として活かそうと、3人の授業者が個々に現代の諸問題の中から選びつつ、コーディネーターを交えて話し合いを重ね、互いに関連した題材を選んでいった。我々が題材選択で心がけたことは、地球市民としての視点が持ちやすいことと、具体的かつ一般化しやすいこと、生徒の日常と関わりがあることである。また、生徒の宗教や国籍に触れることや、生徒が社会や自分を否定して終わるような題材は選択しないように心がけた。

###### 4) 答えのない問題に取り組む

専門家からの知識を得るだけでなく、体験の機会をつくろうと、各テーマグループでマッピング・マインドマップなど、ワークショップ形式の授業を行った。さらに3グループの合同授業では、KJ法を中心としたワークで、分類→統合→明確化という考え方のスキルを身につけさせ、人の意見を聞き、自分の意見を発



佐藤良子先生 授業風景

表する機会を多くした。

## 2 実践内容

### (1)年間授業計画

テーマ			子どもの人権	ジェンダー	貧困と国際協力
内 容			子どもの人権に焦点をあて、世界の子たちを垣間見ながら自分たちの今の生活を振り替える。	ジェンダーの視点で、差異のあるある集団が共生していくには、どうすればよいかを考える。	「貧困」・「国際協力」という課題に向き合い、自分たちがやるべき協力活動を探る。
担 当			三小田・佐藤	原・佐藤	中村・佐藤
回数	月	日	導 入 (仮説を立てる)		
1	10	15	オリエンテーション		
2		22	「共生と平和の科学のねらい」佐藤先生 事前アンケート・希望調査		
3		29	マインドマップから仮説を立てる	マインドマップから仮説を立てる	マインドマップから仮説を立てる
4	11	5	グループ仮説発表会 公開合同授業		
			展 開 (検証する)		
5		19	子どもの権利条約	好ましさとジェンダー	貧困はどこから
6	11	26	子どもにとって幸せとは フォトランゲージ	改めて自分自身をみつめる エゴグラム (国際と合同)	改めて自分自身をみつめる エゴグラム (genderと合同)
7	12	3	協力隊OBの体験談 外部講師 (国際協力と合同)	言葉とジェンダー 佐藤先生「性差区別の変化」	協力隊OBの体験談 外部講師 (子ども、と合同)
8		10	「国際的に見た婚姻法定下限年齢」 南山大学青木先生	「国際的に見た婚姻法定下限年齢」 南山大学青木先生	協力援助の気をつけること 問題発生の原因追及
9		17	児童労働について 債務奴隷	教育とジェンダー ノルウェーの教科書を読む	援助は誰のため何のため
10	1	7	冬休み課題発表会 メディアリテラシー	冬休み課題発表会 メディアリテラシー	冬休み課題発表会 メディアリテラシー
11		14	効果的な援助とは① グループワーク	メディアとジェンダー 外部講師 名大高井先生	(佐藤先生)
			発 展		
12		21	効果的な援助とは② グループワーク	世界のジェンダー 豊かさをはかるものさし HDI/GII/GGGI	国際協力プロジェクト を考える① 自分達のやりたい協力活動
13	2	4	チョコレートと日本人 (バレンタインデーを前に)	AA(affirmative action)/ PA(positive action)の可能性	国際協力プロジェクト を考える② 自分達のやりたい協力活動
			ま と め		
14		18	まとめのワーク「地球市民として私たちにできること」		
15	3	4	集 録 作 成		
16		11	集録綴じ・アンケート		

### (2)グループ仮説発表会の授業案

●S L P II >地球市民学>共生と平和の科学>仮説を立てる>11 / 5 授業案

- 1) 日時・場所 2010年11月5日(金曜日) 4時 限目 図書室
- 2) 生徒 高校2年C組 生徒39名、
- 3) 授業者 佐藤良子(共同研究者) 三小田(英語科) 原(家庭科) 中村(体育科)
- 4) 本時のねらい

前授業に個人で考えた課題を出し合い、グループ毎にまとめて1つの仮説を立て、発表する。

- 5) 授業形態 ワークショップ(マインドマップ) マインドマップは生徒が把握している現在の雑然とした課題を可視化するために行う。
- 6) 準備 生徒: S L P IIファイル、授業でつくったマインドマップ、筆記用具

授業者：大きなマインドマップ用紙（模造紙の中央にセントラルイメージを貼ったもの各1枚、マインドマップを貼るついでに3枚、

10色マーカーを3グループ×2、ワークシート

7) 授業計画

	時間	学習内容	学習活動	留意点 (○) 評価の観点と方法 (◎)	
	導入	5分	目標を知る	先週作ったマインドマップを基に、グループで1つの大きなマインドマップを作り、仮説を立てることを知る。	○グループで丸く座席を作る ○先週提出した生徒にマインドマップを返却する
展開		10分	各自のマインドマップを説明しあう	各自のマインドマップを見せ合い、仮説を立てるにあたって、課題を見つけた経緯をグループ内で互いに説明しあう。	○まずは隣同士から、向かいの人にも見せ合えるように促す ◎自分の説明をし、人の説明を聞くことが出来ているか観察する。
		20分	話し合いでグループのメイントレンドを決める	・各自のマインドマップ参考に、話し合いで5つのメインランチにのせるトレンドを決める。 ・同じような言葉はどちらが基になる言葉か考え選ぶ ・決まった言葉を、ついでに貼ってあるグループマインドマップのメインランチに書く。	○話し合いが進むように、必要なら司会や記録など役割分担をさせる。 ○メイントレンドは広がりやすい単語がよいことを確認させる。 ◎個人のトレンドから、話し合いでどのように5つを選んだか、話し合いを観察する。
		30分	大きなマインドマップを作る	・座席を離れて、グループでマインドマップを作る。 ・メインランチは5つに決まっていたが、この先は自由にランチを広げる。 ・自分のマインドマップに書いたトレンドをグループのマップにも反映出来るように考えて書いていく。	○ついでに付近が混雑するようなら交通整理をさせる ○先週の学習を活かしてトレンドをのせていかせる。しかし、新たなトレンドを書いてもかまわない。 ◎マインドマップがグループ全員の意見を反映したものになっているか観察する。
		40分	出来たマインドマップからグループの課題を見つける。	・席に戻り、3つのグループのマインドマップを見比べる。 ・出来たマインドマップを見て、ランチにのったトレンドから、各グループの課題を見つけ、話し合う。 ・課題をまとめてグループの仮説を立てる。仮説は文章にまとめる。生徒に他のグループの活動を気づかせる。 ・ワークシートに記入する。	○自分のグループ内で活動してきた生徒に他のグループの活動を気づかせる。 ○個人で作ったマップとグループのマップを比べさせて、たくさんの課題を見つけさせる。 ◎マップで「見える化」した課題を見つけることが出来たか、観察する
まとめ	50分	発表する	・互いに仮説を発表し、学び合う。 ・他のグループの課題を聞きながら、ワークシートに記入する ・ワークシートに振り返りを書いて提出する。	◎マップで「見える化」した課題を仮説としてまとめることが出来たか発表を聞く ◎振り返りシートで本時の目標が達成されたか確認する	

### (3)出来上がったマインドマップ



子どもの人権グループ



ジェンダーグループ



貧困と国際協力グループ

### (4)成果と課題

#### 1) 生徒がメインブランチにのせたトレンド (メイントレンド)

マインドマップのメイントレンドは、テーマ (マインドマップではセントラルイメージという) の根幹となる重要な単語でキーワードである。この単語に何を

選んだかということで、生徒たちが各グループの課題がどこで起こり、どのように問題で、社会はどのように取り組んでいるかを、イメージしているかがわかる。

- ①子どもの人権グループが選んだ5つのトレンド  
国連 親 人としての権利 成長 平和
- ②ジェンダーグループが選んだ5つのトレンド  
仕事 学校 思想 生活 文化
- ③貧困と国際協力グループが選んだ5つのトレンド  
医療 産業 政治と金 教育 戦争

#### 2) 各グループの仮説

個人のマインドマップで個人の考えを、グループのマインドマップで複数の考えを構造化した。そこから出てきたグループ仮説は個人だけで構造化したものより現実を反映していると授業者は仮説を立てる。今後はこの仮説をそれぞれの授業の中で検証していく。

##### ①子どもの人権グループの仮説

共生と平和の実現には現在、子どもの人権というものが、大人たちによって全く守られていなかったり、一方では過剰に守られすぎている、という課題がある。この課題を解決していけば、共生と平和の実現に近づき、私たちは地球市民として持続可能な開発目標を達成することが出来る。

##### ②ジェンダーグループの仮説

共生と平和の実現には現在、文化は少しずつ変化して、性差が縮まりつつあるが、社会的な面ではその差は縮まらずに「当たり前」として受け入れてしまっている、という課題がある。この課題を解決していけば、共生と平和の実現に近づき、私たちは地球市民として持続可能な開発目標を達成することが出来る。

##### ③貧困と国際協力グループの仮説

共生と平和の実現には現在、先進国が発展途上国に物質的なものだけでなく、方法・知識を支援しなければならない。しかし現在話し合いが出来ていない、という課題がある。この課題を解決していけば、共生と平和の実現に近づき、私たちは地球市民として持続可能な開発目標を達成することが出来る。

#### 3) 生徒の振り返り

##### ①子どもの人権グループ

大勢でマインドマップをつくと、様々な意見が出てきて新鮮だった。題材が違うとかなり意見が違って面白かった。共生と平和の科学を3方向から見ただけでとても違うところがある。

##### ②ジェンダーグループ

様々な考えがあって1つの文章にまとめるのは難しかった。考えを言語によつて的確に表現し、伝えるのは難しいものだ。他の人の考えを知るのは楽しかった。

## ③貧困と国際協力グループ

様々な方面から見ると、1時間で色々なものが見えてくる。しかし課題が多い。私たち人間が解決しなければいけないのは勿論だが、全ての課題を解決出来るのかどうか不安になる。

## 3 pre・post 選択形式アンケートの分析

## (1)アンケートの概要

	実施日	人数
pre	10月22日	119人
post	3月11日	112人

## 1) 方法

pre・postともに同じ設問をした。答え方は五段階、マークシートで答える。

- |             |
|-------------|
| 5：とてもそう思う   |
| 4：そう思う      |
| 3：どちらでもない   |
| 2：あまりそう思わない |
| 1：そう思わない    |

## 2) 設問

[1] 共生と平和の授業を受けてきた現時点での自分の考えを1～5で答えなさい。

- 1つの授業に複数の教員が関わることにより、様々な視点からの知識が得られると思う。
- 学校外の先生の授業では経験的、専門的な知識が得られると思う。
- 様々な問題が入り組んだ現代的な社会問題に関する知識が得られると思う。
- 「共生と平和の科学」で扱ったような“答のでにくい問題”について学習することは大切である。
- 「共生と平和の科学」で学習したような問題に対して自分の意見や、考えを持つようにしている。
- 「共生と平和の科学」で学習したような知識を活用して自分の意見を組み立て、自分なりの考えを持つようにしている。
- 1つの大きなテーマを3つのグループの視点から多元的に考えることができると思う。
- 1つの課題について深く分析したり、幅広く考えてまとめたりする力を持つと思う。
- 「共生と平和の科学」の授業を通して、自分の教養を深く広くすることができると思う。
- 「共生と平和の科学」の学習がこれからの自分の進路選択や自分の生き方の助けとなると思う。

11 「共生と平和の科学」で学んだことを現実の生活や社会で応用し役立てようと思う。

12 「共生と平和の科学」で学んだことをこれから自分が直面する問題や社会問題を考える際に活用していこうと思う。

13 「共生と平和の科学」で学習した内容について自分の問題意識が高くなると思う。

14 「共生と平和の科学」の学習では知識のみでなく、体感することができ関連する事柄への関心が高くなると思う。

15 「共生と平和の科学」で学習した内容に関連する既存の教科学習の内容についても深く学ぶようになると思う。

[2] 「共生と平和の科学」という教科についての次の質問に1～5で答えてください。

16 少人数で学習したために疑似体験など多様な学習活動ができると思う。

17 「共生と平和の科学」の学習を通して、学び方の多様性が身に付けられると思う。

18 3つのグループの中から選べるのが意欲的に取り組むことにつながると思う。

19 「共生と平和の科学」で1つのテーマを詳しく学んだことが、既存の関連する教科（例、英語・国語等）を意欲的に取り組むことにつながると思う。

20 「共生と平和の科学」で学習することにより、他教科の学習時間が減って、他教科の学力が低下したと思う。

21 「共生と平和の科学」は週1時間では時間が足りないので時間数を増やして欲しいと思う。

22 「共生と平和の科学」を週1時間学ぶより他教科の学習がしたいと思う。

23 総合人間科より「共生と平和の科学」の方が、学習の目的がはっきりしていると思う。

24 総合人間科の方が自分のペースで深く学習する

25 「共生と平和の科学」は、総合人間科以外の他教科より、友人や教員などとともに“人と学びあう”機会が多いと思う。

## (2)結果

対応サンプルの統計量

		平均値	N	標準偏差	平均値の標準誤差
ペア1	pre1	3.61	99	1.11	0.11
	pos1	4.19	99	0.84	0.08
ペア2	pre2	3.98	99	1.08	0.11
	pos2	4.26	99	0.80	0.08
ペア3	pre3	3.59	99	0.83	0.08
	pos3	4.23	99	0.75	0.08
ペア4	pre4	3.74	99	0.99	0.10
	pos4	4.23	99	0.78	0.08
ペア5	pre5	3.38	99	0.87	0.09
	pos5	3.94	99	0.82	0.08
ペア6	pre6	3.37	99	0.85	0.09
	pos6	3.82	99	0.84	0.08
ペア7	pre7	3.56	99	1.03	0.10
	pos7	3.85	99	0.99	0.10
ペア8	pre8	3.55	98	1.00	0.10
	pos8	3.91	98	0.76	0.08
ペア9	pre9	3.70	99	0.95	0.10
	pos9	4.04	99	0.86	0.09
ペア10	pre10	3.27	99	1.01	0.10
	pos10	3.49	99	1.10	0.11
ペア11	pre11	3.37	99	0.92	0.09
	pos11	3.68	99	0.91	0.09
ペア12	pre12	3.39	99	0.98	0.10
	pos12	3.91	99	0.83	0.08
ペア13	pre13	3.41	98	0.92	0.09
	pos13	3.95	98	0.90	0.09
ペア14	pre14	3.48	99	1.01	0.10
	pos14	3.64	99	0.91	0.09
ペア15	pre15	3.13	98	0.92	0.09
	pos15	3.23	98	1.00	0.10
ペア16	pre16	3.66	96	1.04	0.11
	pos16	3.70	96	1.04	0.11
ペア17	pre17	3.56	98	0.91	0.09
	pos17	3.85	98	0.88	0.09
ペア18	pre18	3.55	98	1.05	0.11
	pos18	4.03	98	0.85	0.09
ペア19	pre19	2.98	98	0.95	0.10
	pos19	3.00	98	1.06	0.11
ペア20	pre20	2.48	97	0.99	0.10
	pos20	2.38	97	0.99	0.10
ペア21	pre21	2.55	98	1.14	0.12
	pos21	2.30	98	1.12	0.11
ペア22	pre22	2.67	98	1.12	0.11
	pos22	2.57	98	1.14	0.12
ペア23	pre23	3.17	98	0.96	0.10
	pos23	3.08	98	0.94	0.09
ペア24	pre24	3.24	97	0.92	0.09
	pos24	3.40	97	0.82	0.08
ペア25	pre25	3.42	92	0.85	0.09
	pos25	3.84	92	0.92	0.10

対応サンプルの相関係数

		N	相関係数	有意確率
ペア1	pre1&pos1	99	0.20	0.05
ペア2	pre2&pos2	99	0.27	0.01
ペア3	pre3&pos3	99	0.32	0.00
ペア4	pre4&pos4	99	0.28	0.01
ペア5	pre5&pos5	99	0.29	0.00
ペア6	pre6&pos6	99	0.37	0.00
ペア7	pre7&pos7	99	0.21	0.03
ペア8	pre8&pos8	98	0.34	0.00
ペア9	pre9&pos9	99	0.42	0.00
ペア10	pre10&pos10	99	0.34	0.00
ペア11	pre11&pos11	99	0.36	0.00
ペア12	pre12&pos12	99	0.22	0.03
ペア13	pre13&pos13	98	0.29	0.00
ペア14	pre14&pos14	99	0.29	0.00
ペア15	pre15&pos15	98	0.09	0.38
ペア16	pre16&pos16	96	0.13	0.22
ペア17	pre17&pos17	98	0.37	0.00
ペア18	pre18&pos18	98	0.28	0.01
ペア19	pre19&pos19	98	0.28	0.01
ペア20	pre20&pos20	97	0.28	0.01
ペア21	pre21&pos21	98	0.31	0.00
ペア22	pre22&pos22	98	0.24	0.02
ペア23	pre23&pos23	98	0.30	0.00
ペア24	pre24&pos24	97	0.44	0.00
ペア25	pre25&pos25	92	0.26	0.01

対応サンプルの検定

		対応サンプルの差				t値	自由度	有意確率 (両側)		
		平均値	標準偏差	平均値の 標準誤差	差の95% 下限	信頼区間 上限				
ペア1	pre1-pos1	-0.59	1.25	0.13	-0.84	-0.34	-4.65	98	0.00	*
ペア2	pre2-pos2	-0.28	1.16	0.12	-0.51	-0.05	-2.42	98	0.02	*
ペア3	pre3-pos3	-0.65	0.93	0.09	-0.83	-0.46	-6.92	98	0.00	*
ペア4	pre4-pos4	-0.49	1.07	0.11	-0.71	-0.28	-4.59	98	0.00	*
ペア5	pre5-pos5	-0.56	1.00	0.10	-0.76	-0.36	-5.52	98	0.00	*
ペア6	pre6-pos6	-0.44	0.95	0.10	-0.63	-0.25	-4.65	98	0.00	*
ペア7	pre7-pos7	-0.29	1.27	0.13	-0.55	-0.04	-2.29	98	0.02	*
ペア8	pre8-pos8	-0.36	1.03	0.10	-0.56	-0.15	-3.44	97	0.00	*
ペア9	pre9-pos9	-0.34	0.98	0.10	-0.54	-0.15	-3.48	98	0.00	*
ペア10	pre10-pos10	-0.22	1.22	0.12	-0.46	0.02	-1.82	98	0.07	
ペア11	pre11-pos11	-0.30	1.03	0.10	-0.51	-0.10	-2.91	98	0.00	*
ペア12	pre12-pos12	-0.52	1.14	0.11	-0.74	-0.29	-4.51	98	0.00	*
ペア13	pre13-pos13	-0.54	1.09	0.11	-0.76	-0.32	-4.93	97	0.00	*
ペア14	pre14-pos14	-0.15	1.15	0.12	-0.38	0.08	-1.32	98	0.19	
ペア15	pre15-pos15	-0.10	1.30	0.13	-0.36	0.16	-0.78	97	0.44	
ペア16	pre16-pos16	-0.04	1.38	0.14	-0.32	0.24	-0.30	95	0.77	
ペア17	pre17-pos17	-0.29	1.01	0.10	-0.49	-0.08	-2.81	97	0.01	*
ペア18	pre18-pos18	-0.48	1.15	0.12	-0.71	-0.25	-4.13	97	0.00	*
ペア19	pre19-pos19	-0.02	1.21	0.12	-0.26	0.22	-0.17	97	0.87	
ペア20	pre20-pos20	0.10	1.19	0.12	-0.14	0.34	0.85	96	0.40	
ペア21	pre21-pos21	0.26	1.33	0.13	-0.01	0.52	1.90	97	0.06	
ペア22	pre22-pos22	0.10	1.39	0.14	-0.18	0.38	0.73	97	0.47	
ペア23	pre23-pos23	0.09	1.12	0.11	-0.13	0.32	0.81	97	0.42	
ペア24	pre24-pos24	-0.16	0.93	0.09	-0.35	0.02	-1.74	96	0.08	
ペア25	pre25-pos25	-0.41	1.08	0.11	-0.64	-0.19	-3.67	91	0.00	*

正 pre > post  
負 pre < post

\* 有意差がある

これらの図表から次の結果を得た。

- ・ preに比べてpostの方が得点が上がった項目は21項目である。
- ・ preに比べてpostの方が得点が上がった項目は4項目である。
- ・ t検定を行った結果、15項目に有意差があった。

(3)考察

結果を内容に照らして考察をしてみた。

1) 設問1～15についての考察

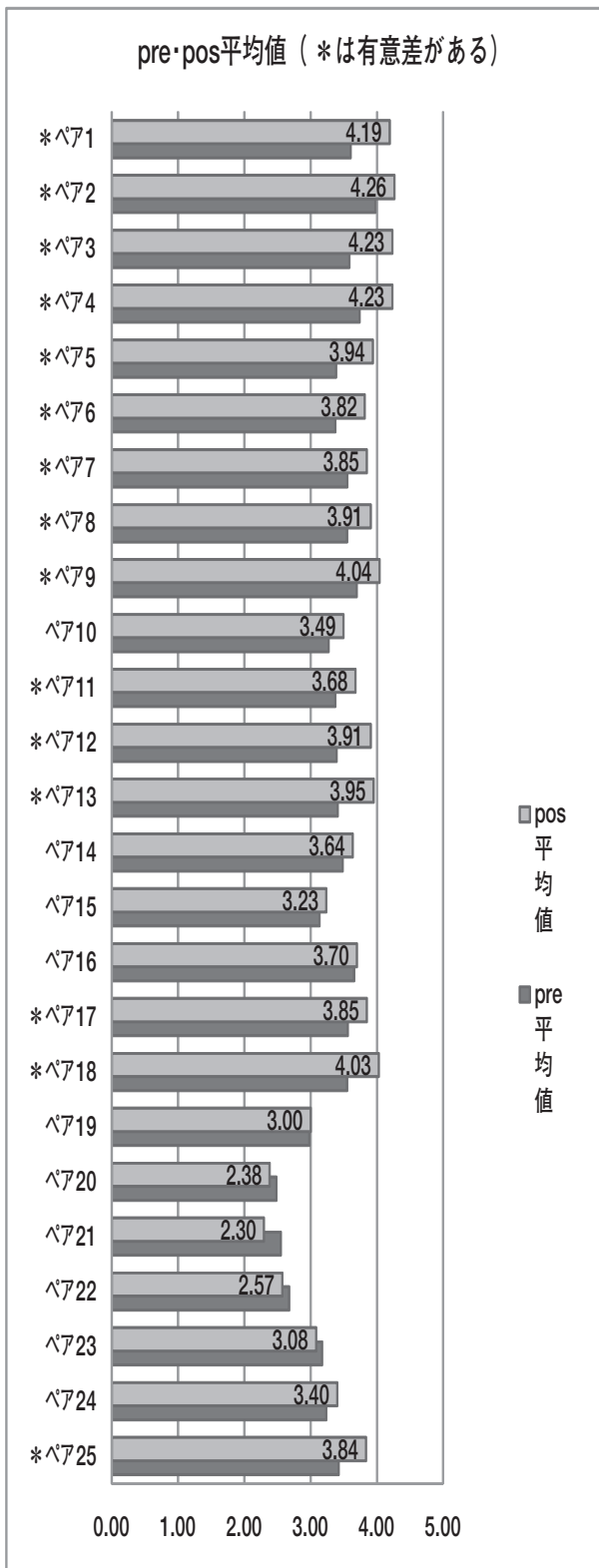
- ・ 1～15は共生と平和の授業に対する考えを聞いている。3項目(ペア10、14、15)を除いて12項目で有意にアンケートの得点が上がったということは、この授業は成果があったといえる。
- ・ ペア1～4の設問がpostで特に高い得点である。これはS L P IIの独自性(複数の教員、学外講師の授業、答えのない問題に取り組む)有効だとする生徒の意識が有意に変化したといえる。
- ・ t値が最も小さいのはペア13の設問である。共生と平和の学習内容に対する問題意識がかpreとpostでより高くなったといえる。
- ・ postの平均値が最も高いのはペア2(学外講師の授業)である。preでも平均値が高かったが、共生と

平和以前のS L P IIの経験から評価が高く高い得点になった野かも知れない。postでさらに有意に高くなっているため生徒は学外講師の授業を大変評価しているといえる。

- ・ postの平均値が最も低いのはペア15である。既存の教科との関連を問いているが、preでも低く、大きな変化はみられなかった。

2) 設問16～25についての考察

- ・ 設問15～25は「共生と平和の科学」を他の教科と比較している。10項目のうち、3項目がpreに比べて有意にpostの得点が上がった。他教科と比較するアンケートでは、設問1～15のように明らかな生徒の意識の変化はみられなかった。「共生と平和の科学」(S L P II)が始まって8年になるので教科として認知されたのか、比較することが難しいのか(国語と数学を比べることが難しいように)は判らない。
- ・ 3項目(ペア20、21、22)でpreもpostも平均値で3より低い。さらにこの3項目はpreよりposの方が平均値が下がった。ペア23もpostの方が平均値が下がっている。有意差はみられないがS L P IIを他の教科と比較しているのは教師であり、生徒は週1単位ものとして認知していると考ええる。



(文責：原 順子)